



婦人の目

教皇さまが「神の愛された

国」と言われたフィリピンの地を、今年も訪れることができた。一つの目的は、昨年の訪問がきっかけになって始まったフィリピン・コーナーのバザーで売ったスラム青年グループの「つぼ」の作業場を見ることであった。

そこは、三疊(じょう)半くらいの狭くて、暗い部屋で、あるものは長い机と小さい、そして絵付け用の絵具だけという場所であった。

つぼを売ったお金で、去年の掘っ立て小屋風の作業場

は、大きなベニヤ板がピツタとはりつけられた壁に変わり、窓には、細い棒が放射線上にうちつけられていた。私たちの訪問を聞いて、彼らはたくさんつぼに絵を描いて待っていてくれた。

飛行場では、ダンボールは

フィリピンのつぼの旅

藤屋 紀子

機内に持ち込み禁止と言われ、荷物をほどき、それぞれのスーツケースにおし込んだりして、つぼを包んであった新聞紙で手はまっ黒。このかつこ悪さ。何となくシロシロ見られている感じ。スーツケースの重さ。機内では、どつと疲れがでて、食事もあり

おいしくなかった。

しかし、日本に帰った次の日、いい話を聞いた。

前回のバザーで売られたつぼは、スラムの青年たちの話と共に、カンボジア難民のキャンプにボランティアに行っている僧侶(りよ)の手に渡

った。感動した僧侶は、そのつぼを持って、再びカンボジアに行き、難民キャンプで土をこねている人々の手に渡された。

今、この小さなつぼは彼らの部屋の棚の上に飾られ、カンボジア難民キャンプの人々の大きな励みとなっていると

いう。

フィリピンのスラムの青年とカンボジア難民キャンプの青年たちは、多分生涯出会うことはないだろう。私たちに見えるのは、いつも生活の外側である。外側は外側にすぎないものである。

難民キャンプに飾られたつぼも、スラムの青年の作業場のベニヤも貧しく、みすぼらしく、目に美しくは映らないし、そこから完全な答えは求められない。しかし、それらの物の奥にある多くの人々の手と汗と息づかいに気づきたい。本当の答えはいつも中に隠されている。旅したつぼは、私たちの生活の中で、もう一つ奥へ進むらせん状の階段を昇り始めている。